



【住 所】北海道士別市東11条5丁目3029番地1

【病 院 長】吉川 紀雄先生

【病 床 数】230床

【スタッフ】消化器内科医師 4名、消化器外科医(内視鏡対応) 3名、呼吸器内科医(気管支担当) 2名、内視鏡技師・看護師 各5名(うち4名がローテーションで内視鏡室を担当)、助手 2名

【内視鏡検査・治療総数】(平成20年度) 上部内視鏡検査数 2,200件、下部内視鏡検査数 1,500件、ESD 20件、内視鏡的止血術 120件、EIS 10件、EVL 20件、ERCP 200件(うち胆道処置160件)、PEG 90件、気管支鏡検査数 80件、経鼻内視鏡検査 300件

【保有設備】上部用スコープ 12本、下部用スコープ 7本、十二指腸用スコープ 3本、超音波スコープ 2本、気管支鏡 3本、ハイビジョン内視鏡システム装置 3台(うち2台がNB I搭載)、洗浄機 3台

## スタッフ全員が高い意識で参加するチーム医療で 患者様の利益を最大限に高める医療サービスを提供

### ● 地域のニーズに応えるため本年5月に内視鏡センターを拡大

北海道北部エリアの上川支庁に位置する士別市立病院は、「高い技術と思いを最大限に活かせる病院」をモットーに、内視鏡センターを含む4つのセンターと5つの専門外来を備え、高度で専門的な医療サービスを地域や近隣市町村の住民に提供しています。同院は内科と外科の連携が良いことが特徴で、外科医も積極的に内視鏡治療を行っています。また、IVR治療などは内科医・外科医が協力して行い、さらに集学的治療を目的に旭川医科大学との連携も強化しています。

平成21年5月には内視鏡センターを拡大し、PEGセンターを併設して胃瘻造設にさらに注力しました。近隣で胃瘻を造設できる施設がなかったことから、外科医は造設の手技だけにとどまらず

NST(Nutrition Support Team)の主査も務め、病院全体で良質な栄養管理を総合的に提供しています。NSTではPEG施行後20日で退院できるようなクリティカルパスを導入し、患者様の状態に合わせた栄養管理を行っています。同院でPEGを施行した患者様は全てデータベースで管理し、カテーテルの種類やサイズを登録するとともに交換時期のアナウンスを行って患者様をフォローしているそうです。また、摂食障害や脳血管障害の患者様を受け持つ地域の病院やクリニックと連携して地域PEGネットワークを確立し、予約制のPEG外来を行っています。同院副院長の山田政孝先生は、「内科医が行っている内視鏡治療は年々高度化し、リスクを伴う高度な手技を行うことも増えています。そのため、外科医が常に様々なバックアップを行ってくれることで、治療の選択肢も増え、また内視鏡医が安心して検査や治療に専念できるのです」と、同院の診療科を超えた連携の生み出すメリットについてお話になりました。



副院長  
山田 政孝 先生



## ● 医師とスタッフの相互理解は 些細な疑問や意見も取り上げる 風通しの良い環境から生まれる

同院の内視鏡センターは、限られたスタッフで専門性の高い内視鏡検査や治療を実施するため、内視鏡技師や看護師と内視鏡医が連携したチーム医療を平成19年4月に発足させました。これに伴い、看護記録の充実と病棟との情報伝達を推進し、安全で確実な医療サービスの提供に務めてきました。山田先生は、「内視鏡技師は医師と一緒に治療戦略の検討についても参画してもらっています。チーム医療は、スタッフ一人ひとりがちょっとした疑問や気づきを自由に発言できる環境を作ることがまず重要です。そうした些細なことも前向きに伝えていくことで、医師とスタッフの相互理解が深まり、チームワークは向上します。当院ではこのようなことを実践することで院内の職員全てに対して自分の職務の目的や方向性を理解してもらい、自主性とやりがいをもって職務を全うすることを求めています。これにより、個々の成長だけでなく、最終的には患者様の利益に繋がると考えています」と、チーム医療の重要性についてお話をいただきました。

## ● 徹底したコスト管理とリスク分析を行い 処置具のディスポーザブル化を実現

内視鏡センターでは、平成15年より内視鏡処置具をディスポーザブル製品に切り替え、またスタンダードプリコーションを原則に日本消化器内視鏡技師会のガイドラインを遵守した内視鏡の洗浄・消毒

を徹底するなど、早くから感染対策に取り組んできました。内視鏡の洗浄・消毒についても、従来の強酸性水からフタール製剤を用いた高水準洗浄消毒へと移行しました。感染対策を講じるにあたってはコスト面でハードルとなる場合もありますが、内視鏡技師の佐藤 貴幸さんに導入時の経緯などを伺ったところ、「まず人件費、内視鏡修理費、内視鏡処置具やガーゼ、手袋などの消耗品、さらに水道・電気代などを含み、内視鏡センターにおける全てのコスト試算を行いました。また、毎月レセプトを始めとする全ての購入実績を収集してデータをまとめ、経営側がわかりやすいよう現状のエビデンスとリスクを提示することで、内視鏡センターの改革路線を押し進めてきました。特に、リユース製品については洗浄不良による感染のリスクを訴え、感染管理における絶対的な安全性を有するディスポーザブル製品の導入までこぎつけました」と、導入当時のご経験についてお話をいただきました。

良好なチームワークと徹底した感染管理で地域の患者様の健康を支えている内視鏡センターですが、今後はWOCナースの常勤などのさらなる医療サービスの充実を課題としているそうです。地域住民に愛され、信頼される病院である続けるために、病院全体で改善や改革を推進する、明るく風通しの良い雰囲気スタッフがの皆様から伺えました。



内視鏡技師  
佐藤 貴幸 さん



内視鏡センターの皆さん